

コラム

「スペシャリストで少数派」の落とし穴 ～新たな多様性時代へ

日刊工業新聞社 論説委員・編集委員
山本佳世子

国際 P2M 学会の皆様こんにちは、ごぶさたしております。私は大学・産学連携担当の新聞記者で、10 数年前に社会人博士学生として学会発表や論文でお世話になりました。当時の経験は、博士教育や研究環境の記事を書く時に生きています（ご参考：ブログ「産学連携取材日記」で裏話など書いています）。

また、理工系の修士課程修了後に記者になった経歴から、理系女性キャリアも時々取材してきました。2021 年 5 月に書籍「理系女性の人生設計ガイド～自分を生かす仕事と生き方」（講談社ブルーバックス）を、2 人の女性研究者と共著で完成させており、その中で取り上げたテーマの一部をここで紹介させていただきます。

ここ数年の女性活躍・ダイバーシティ推進の社会変化は驚くほどの急展開です。キャリアに関わる情報やノウハウも、メディアで豊富に紹介されています。ただ、「理系×女性」という「スペシャリストで少数派」の場合は注意が必要です。

理系女性は、理系男性とも文系女性とも違う面を持っています。理系男性は技術系の「スペシャリストで多数派」のことが多く、管理職での昇進より専門の腕を上げることが望む人がそれなりにいます。組織で経験値を上げてから IT を武器に転職したり、仲間とベンチャーを起業したり、大学教員に転身したりといったキャリアチェンジも珍しくありません。大企業からの出向となっても、技術関連

の強みを生かして楽しそうにしている人も見受けられます。

一方、文系女性は保健系や金融機関などでは「ゼネラリストで多数派」です。今なら 30 歳など比較的、早い年齢で部下を持ち、組織内の人間関係をよく把握し、ビジネススキルを磨く機会も出てきます。同性には励ましあう仲間と同時に、嫉妬心が強かったり意地悪だったりする同僚もいて、仕事に対する考え方も多様であることを職場の体験から理解しているはずで

どころがどうでしょう。理系女性は自分を重ね合わせられるモデルを、周囲にほとんど見つけられません。そのため自分はどのように成長していくのかが、想像しづらいのです。年齢を重ねて、組織のリーダーとして「脱皮していく」ことが求められるようになっても気づかず、途方に暮れることがしばしば、出てくるのです。

実はこれは私自身の経験でもあります。博士号取得もあり「私は専門職だから」とやや自分勝手をする面が出てしまい、組織を支える多数派の日々の苦勞に目が向かなくなってしまったのです。50 歳頃に訪れた「キャリアの危機」、つまり「キャリアをもう続けられないのではないか」という惑いは、周囲を顧みなくなっていた姿勢が一因だと考えています。これはスペシャリストかつ少数派の、共通の落とし穴なのではないでしょうか。

また、「少数派の中の多様性」に気づかなかったことも重なりました。同じ部署で女性は自分1人だけ、その後は2人だけという期間がともに長くありました。その後、計5人ほどの理系女性記者とともに仕事をはじめ、「同じと思っていたのに、こんなに違うものなのか」と驚いたのです。取材先への食いつき方やミスした時の落ち込み方、ワーク・ライフ・バランスのとらえ方など、「社内では少数派であっても、決して一括りにはできないのだな…」と実感したのです。数が増えてくれば仲間の中からも、競争心や嫉妬心が芽生えてくるのだということにも、長らく気づきませんでした。

社会にはいろいろな人がいる一。それは当たり前のことですよね。でも例えば男性ばかりの会議で女性が一人だけの場合に、「女性の場合はどうですかね」という問いかけなど出ませんか？ 尋ねられた方は「私が女性すべてを代表しているわけではないのに…」と、とまどうことを複数の当事者から聞いています。少数派をひとところに押し込めず、少数派の中の多様性にも思いを巡らせなくてはいけない時代になってきているのです。

また昨今は女性部下を持つ管理職男性が増えています。その時に意識すべきはなんといっても、無意識の偏見（アンコンシャス・バイアス）でしょう。これは差別的な偏見ではありません。相手に対してよかれと思った時の、「こうであるはずだ」という思い込みもあります。

例えば子育て中の女性に「彼女に出張はまだ無理なのではないか。同世代の男性に替わってもらおう」と考えた場合などどうでしょう。本当はその女性は「私にぜひやらせてください！」と意欲を示

したかもしれません。「替わってもらって助かりました」というかもしれません。微妙なところですがいずれにせよ、上司が判断する前に、本人に直接、聞いてみればよだけのことなのです。また、たとえ本人が躊躇したとしても、「あなたの成長の上で今こそ、この仕事を手がけてほしい」といったメッセージも出す必要も、時としてあるのではないのでしょうか。

年長者は若年者と違い、経験に裏打ちされた自信を持っています。だからこそ、ある事柄に対してスムーズな判断ができるのです。つまり「年長者には誰でも、アンコンシャス・バイアスがあるものだ」と意識していることが、一番の対策ではないのでしょうか。

学会は専門家の集まりですので、P2Mの皆様は男性でもそれぞれの職場などで「スペシャリストで少数派」の立ち位置を経験されるかもしれません。部下、同僚、上司、仕事先などで接する理系女性の立ち位置を、理解できる応援団に、なっていただけるのではないのでしょうか。豊かな社会を築く、もう一段上の多様性時代に向けて皆で力を合わせてまいりましょう。



(2021年9月19日 受理)